

「誰も見捨てない町」

—初稿—

2026/3/22

米俵

〈人物表〉

蓮見 誠 (23) 新人警察官

弓削 達也 (38) 誠の先輩・警察官

安達 孝 (68) 白輪町の住民

住民 A

住民 B

子ども

小学校高学年程度

1. 白輪町・商店街（昼）

昭和感のある商店街。程よい人込み。
街頭スピーカーからは白輪町ソングが流れている。
親しそうな雰囲気のお店とお客。店主が笑うとそれ
につられたように客が笑う。
その笑いは隣の店へ、通りを歩く人へと、波紋の様
に不気味に広がっていく。

街頭スピーカーの声「犯罪ゼロの町。白輪町。みなさんのご協
力に感謝します」

2. 白輪町・住宅街（昼）

二台の自転車が走り抜ける。
先頭に行く蓮見誠（23）、真新しい制服姿。
誠、確かめるように後ろを振り向く。

弓削達也（38）、落ち着いた様子で誠に続く。
「誠、道分かってんのか？」
誠「余裕ですよ」
と言いながら、立ちこぎに切り替える。

3. 白輪町・安達家前（昼）

誠、インターホンを押す。達也、側で見守る。
間髪入れず、玄関のドアが荒々しく開く。安達孝（
68）が出てくる。

安達「おっせーんだよ」
誠「警察です。白和交番の蓮見です。通報を受けて伺いまし
た」

弓削「同じく弓削です」
安達、弓削を見て、怪訝な顔。

誠「どうされましたか？」
安達「だから、電話でも言っただろ。不法侵入だよ」
誠「何か、荒らされたりしましたか？」
安達「ゴミが戻ってんだよ」

誠 「え？」

安達 「朝出したゴミが俺のところに戻ってきてんの」

誠、ゴミ袋を確認して、

誠 「このゴミ……ですか？」

弓削 「出し忘れたのではないですよね？」

安達 「ちげーよ」

と、声を荒げる。

合わせたように近所の人が変わらわらと出てくる。全

員、口元に笑みを浮かべている。

安達、その様子を見て舌打ち。

住民A、誠と目を合わせて、会釈する。

住民A 「ありゃ。安達さん、また忘れちゃったんだ」

住民B 「大丈夫ですよ。また、私たちが片付けておきますから」

安達家の敷地へ近付いていく住民たち。

安達、声を荒げて、

安達 「お前らだろうが」

誠、安達の腕に手を添える。

誠 「安達さん、落ち着いて下さい」

弓削、住民たちに向き直って、

弓削 「宜しければ、あちらで少しお話聞かせてもらっても良い

ですか？」

と、穏やかに促す。

住民たち、抵抗もなくなっていく。

誠、その背中を見る。

安達 「おい、お前。新人か？」

誠 「バレちゃいました？」

安達 「……あいつらには気を付けろよ」

誠 「え？ どういうことですか？」

住民が窓から安達家を見ている。

安達、それに気付いて、

安達 「……なんでもない」

誠 「安達さん？」

安達、玄関の中へ引っ込む。ドアが静かに閉まる。

4. 白輪町・交番・執務スペース（夜）

弓削、ノートパソコンで報告書を作成している。誠、それを向かいに座って見ている。

誠 「俺、書きますよ？」

弓削 「……いや、大丈夫」

誠 「安達さん、平気っすかね？」

弓削 「認知症ならまた呼ばれるかもな」

誠、弓削に鋭い視線を向けて、

誠 「それ、本当なんですかね？」

弓削の手が止まる。タイプ音が消え、静寂。

女性の声「あのー……すみません」

誠、立ち上がり、入口へ向かう。

× × ×

弓削、難しい顔をして、パソコンの前に座っている。
delete ボタンを押す指。

パソコン画面。文章が消えていく。

誠、戻ってくる。

弓削、それに気づき、急いでパソコンを閉じる。

誠 「終わりました？」

弓削 「ああ……」

誠、弓削を見つめる。

弓削、誠の方を見る。

誠、笑顔で、

誠 「俺、パトロール行ってきましたね」

5. 白輪町・商店街（夜）

シャッターの閉まったお店が並ぶ。どのお店にも「
犯罪ゼロの町」と書かれたポスターが貼られている。

誠、ゆっくりと通り抜けていく。白輪町ソングを鼻

歌で歌う。

6. 白輪町・安達家前（夜）

パトロール中の誠が通りがかる。

安達家、電気が消えている。

誠、少し離れたところに自転車を止め、安達家を見る。

(小学校高学年程度の)子どもが、安達家に近づく。

手にはゴミ袋。

子ども、ゴミ袋を安達家の敷地へ投げ入れる。

誠、急いで近付き、

誠 「おーい、どうした?」

子ども、不思議そうな顔。

誠 「今、なんか投げたでしょ?」

子ども、誠をジッと見て、

子ども 「……みんなやってるから」

子どもの口元に笑み。

誠、ハンドルを強く握る。表情は見えない。

7. 白輪町・交番(朝)

誠、伸びをしながら執務スペースから出てくる。

既に待機している弓削に近付いて、

誠 「天気、いいっすね」

住民B、慌てた様子で走ってくる。

息をきらしして、

住民B 「あの、すみません」

弓削 「どうされました?」

住民B 「あの……安達さんが——」

誠、飛び出していく。

8. 白輪町・交番・執務スペース(夕)

夕日差し込む。

誠、コーヒーの準備をしている。

弓削、パソコンの前に座っている。

誠 「ブラックですよね?」

弓削 「ああ……」

誠 「心不全、ですか」

弓削、無言でタイピング。

誠、コーヒーを持って弓削に近づく。

誠 「先輩、マジでそれ俺がやりますよ」
弓削 「いい」

そう言つて、パソコンを閉じる。

誠、弓削にコーヒーをかける。

弓削 「あつっー」

誠、ノートパソコンを奪う。

弓削、取り返そうと抵抗する。

誠、弓削を投げ飛ばす。

弓削、壁に叩きつけられる。苦しそうな表情。

誠、パソコンを開き、画面を見つめる。

誠 「……これじゃ、ダメですよ」

弓削 「……お前」

誠 「先輩も分かつてるでしょ？」

弓削、無言。

誠 「安達さんまで……」

弓削 「ちがっ——」

誠 「ゼロなんですよ」

外から、笑い声。

誠、その音に耳を傾ける。

弓削の顔を覗き込んで、

誠 「ほら、みんな、そうしてますよ」

9. 白輪町・土手(昼)

二台の自転車が走っている。

先頭は弓削。疲れきった表情。

その後ろに誠。

誠 「せんぱーい」

弓削、無視する。

誠、軽くベルを鳴らす。

弓削、ビクっとして、軽く後ろを振り返る。

誠、住民と同じ笑顔。

真顔に戻って、独り言のように、

誠 「……すぐに慣れますよ」